

信州の伝統的工芸品

信州紬

経済産業大臣指定伝統的工芸品 昭和50年2月17日指定



伝統マーク
承認番号R2-000



信州紬の概要

信州は、古来より養蚕が盛んであり、明治時代以降、基幹産業として製糸業が発展し、岡谷・諏訪、松本、上田等に製糸工場が多く見られました。養蚕農家で、生糸にし難い繭等を真綿にして、それを紡いで織るようになり、養蚕の産地がそのまま織物産地となりました。生糸で作られた絹織物と違い、この紬織物は、江戸時代においては庶民の使用が唯一認められていたもので、

普段着として広く普及しました。

「上田紬」、「松本紬」、「飯田紬」、「伊那紬」など、県内各地で発達した紬を合わせて「信州紬」と呼ばれています。

各地に自生する様々な植物染料を用いた「草木染」による染色が活発であり、また、安曇野地域のくぬぎ林で飼育される山繭(天蚕)は、他の産地にはない独特の風合いを醸し出しています。

【主要産地】

上田市、松本市、
飯田市、長野市、
岡谷市、駒ヶ根市
ほか



歴史・沿革

信州は蚕の国。江戸時代からの伝統を持つ上田地方の「上田紬」をはじめ、松本地方の「松本紬」、飯田地方の「飯田紬」等、各地に素朴な味わいをもつ紬が盛んに生産されており、これらを合わせて信州紬と呼ばれています。

信州は清冽な山国、ここで織られる紬は伝統の素材を近代感覚に生かし、きりりと歯切れのよい美を織りなしてゆきます。

信濃国と呼ばれた遠い昔より絹の国として手織にこそしむ人々は、永い歴史の流れのなかに静かな息づきを続けていました。

江戸時代初期頃より、各藩で

は桑樹を栽培させ、養蚕を奨励しました。紬は屑繭を原材料としましたので、原材料生産地がそのまま織物生産地となり得たのです。

寛延3年(1750年)8月 紬荷物を京都に送り出したのを皮切りに、宝暦から明和の時代にかけて毎年のように送られています。

春繭が糸にとられ織物となった8月下旬から9月初めにかけて、京都大丸は、紬を求めにわざわざ手代を派遣し、紬荷物は中仙道を京都へと送られてゆきました。

調度貢献明細表によれば、「信濃国は紫草二八〇〇斤を産

して常陸国(茨城県)の三八〇〇斤に次ぐ全国第二位の紫草の産地たり」と記されているように草木染材がいたるところに自生していたことから、草木染、手織の技法が全県にわたって普及したものと考えられます。

昭和の中頃までは、技術保存の名のもとに僅かに続けられていただけでしたが、戦後、紬織物の復興が図られ、県を始め市町村の振興策が積極的に推進されてから、県下全域にわたって生産が活発となっていきました。



産地の取組

自然が生み出した独特の色彩

信州紬の特長の一つは、「草木染」にあります。山野に自生する、栗、唐松、小梨、山桜、白樺、イチイなどから染液を煎じ出し、昔ながらの手染めの技術と方法で糸を染めています。「草木染」ならではの深みのある柔らかな色合いを醸し出しています。



手織り体験

草木染をした糸を、1本1本手織機で織り上げていく体験。軽くて柔らかく、しっとりとした、手織紬の手触り、風合いを楽しめます。

手織り体験を通して、信州紬の良さをより多くの方に知ってほしいと思っています。



アクセス

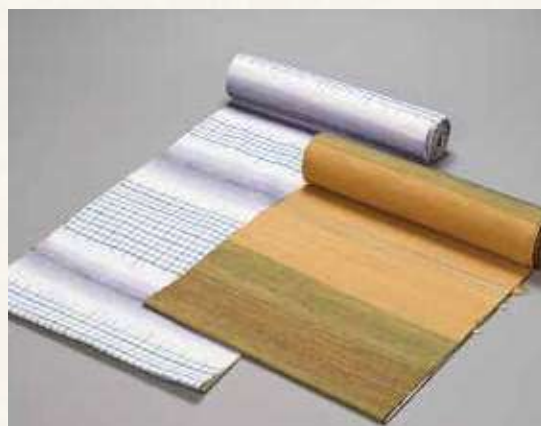


長野県織物工業組合

〒399-4106 長野県駒ヶ根市東町2-29

久保田織染工業(株)内

TEL0265-83-2202 FAX0265-83-2204



◎お財布と櫛ケース



◎ネクタイと襟巻き



地域の特徴を活かして

信州の各地で、それぞれ特徴のある紬を織っています。

特に、各地に自生している植物を用いた「草木染」は、信州紬の特長のひとつです。山々から山野草を採取し、独特の風合いのある染料を作り、染色した「信州紬」の美しさをお楽しみください。



◆ 撚糸



◆ 染色



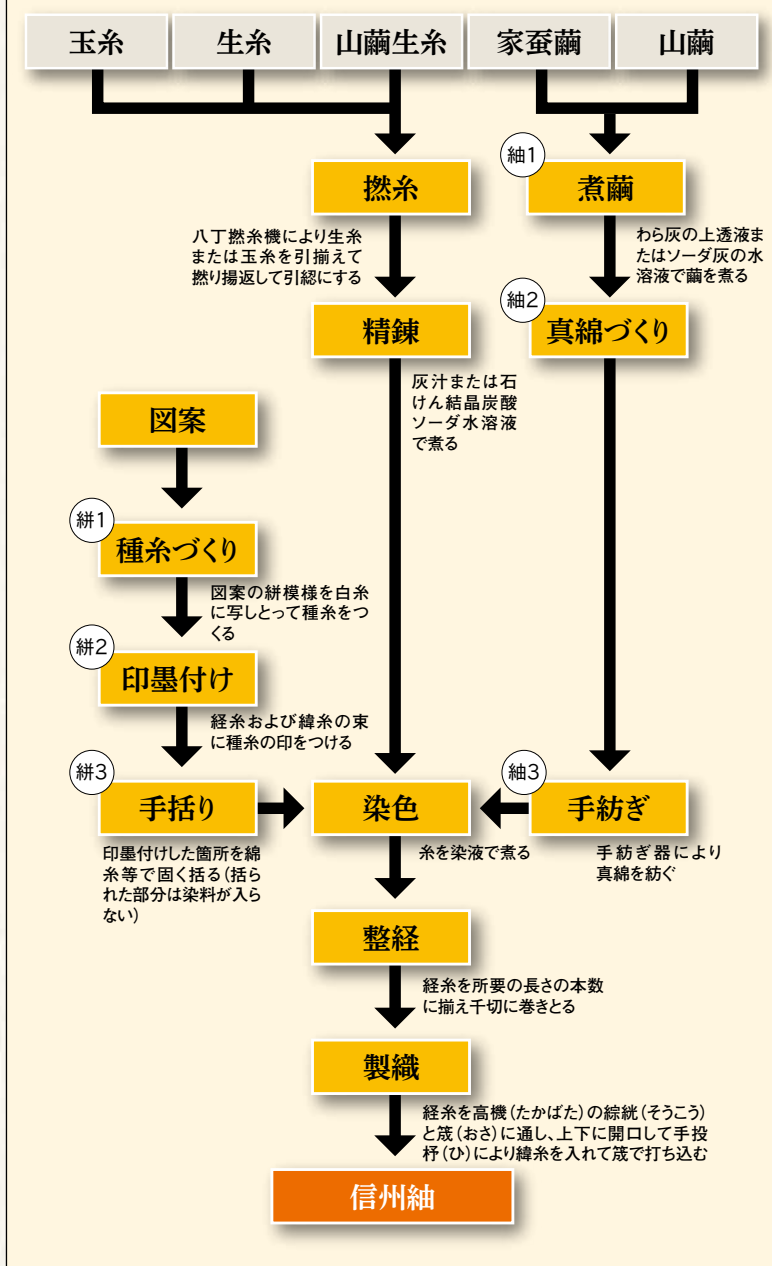
◆ 整経



◆ 製織



【製造工程】



職人の技と心

「信州紬」は、信州の女性が、家族のために代々受け継ぎ、織り続けてきた紬です。信州各地の特色を活かしながら、独特の手織り機で一本一本丹精込めて手織りにすることにより、手造りの良さを今に再現しています。

